

魚類養殖経営の安定を目指して

長崎県南申山町漁業協同組合青年部
部長 井上真二

1. 地域の概況

私たちの住む南申山町は、長崎県の南東にある島原半島の西端に位置し、海岸線は長く橋湾に臨み、海岸はすべて磯浜で、海岸からすぐに山へ登る棚田の多い人口約五千人の美しい町である。また、沖合には橋湾と有明海の潮流が好漁場を形成する古くから漁業が盛んな地区である。(図-1)

2. 漁業の概況

南申山町漁協の組合員数は、正組合員が147名、準組合員が249名である。

漁業種類は、中小型まき網、敷き網、刺網、小型底曳網、魚類養殖、煮干加工業である。

南申山町漁協内の平成10年度の漁獲量は2,136トン、漁獲金額は815百万円であり、そのうちハマチを中心とする魚類養殖業の水揚げ量は403トン、水揚げ金額は384百万円となっている。水揚げ金額について言えば漁獲金額の約50%を占めており、南申山町漁協管内において養殖業はとても重要な漁業となっている。(図-2)

3. 研究グループの組織と運営

南申山町漁協青年部は、昭和56年に設立され、長崎県青壮年部連合会活動への参加、先進地視察や浜掃除の実施、南申山町ふるさと産業祭りへの参加など地域の活動に積極的に取り組んでいる。

部員は現在20名で、そのうち6名の養殖業者で養殖部会を構成している。

4. 研究・実践活動課題選定の動機

南申山町の魚類養殖は昭和49年頃から始まり、現在の経営体数は8戸で、主にハマチ養殖を営んでいる。

南申山町のハマチ養殖は、天然のモジャコを採捕し、冷凍イワシなどの生餌を与えながら丁寧に育て上げ、1キロ未満の中間養成魚は四国方面に、4キロサイズの成魚は長崎県漁連を通じて福岡方面へ活魚出荷していた。(図-3)

しかし、近年のハマチ生産過剰による価格の急落、マイワシ不漁による生餌の不足と価格の高騰などにより、養殖漁家の経営は苦しいものとなっていった。

「このままでは養殖漁家はつぶれてしまうのではないか」と危機感を持った私たちは、ハマチの価格向上と経営安定のために研究を開始した。

5. 研究・実践活動状況及び成果

私たちは先進地視察や研修会などで学んだことについて色々と話合い、自分たちの養殖内容について、父親と一緒にやってきた経験と勘に頼った養殖ではなく、少しでも科学的な観点から経営状況の分析をやってみようということになった。

その当時の私たちは、経営分析ができるような詳しい経費の内容を記帳していたわけではなかった。そこで、出来るだけ経費の内容や生け簀単位の養殖尾数、魚体重、給餌量などを月単位で記帳していく

活動を始めた。

この活動によって餌料費、薬品代、人件費などの直接経費の割合が高く、水揚げがある割には収益が思ったほど少ないということがわかり、無駄な経費を見つけ出して減らすことに役立った。

しかし、餌やハマチの価格変動は依然として大きいので、市場の情報を集めて、少しでも安い餌を求めて走り回ったり、作業にかかる経費を減らすことによって得られた儲けもすぐになくなり、苦しい経営は続いた。(図-4)

結局、収益を上げるためには、他の企業と同じように少しでも生産コストを削減し、いかに収益性を高めるかが課題であると考え、放養尾数や魚体重を正確に把握し、適正な給餌量を計算して餌を与えるようにした。

しかし、始めてみて、適正給餌量を計算して餌を与え続けることがいかに大変であるかがわかった。毎日計算機を片手に長時間机へ向かい、疲れた体に鞭打って正しい数字を出すには大変苦勞し、この苦勞が記帳を続けていく上での最大の問題となった。「魚の成長を変えずに経費の削減はできるようになってきた。でも、これは安い餌用のサバがあったからで、サバが高くなりハマチの価格が下がると収益はあがるのか下がるのかわからない。こんなに苦勞して記帳を続けても状況が変わった時にすぐ対応できない。」私たちは壁にぶち当たってしまった。

このような時にパソコンを利用した養殖で効果をあげている話を耳にし、藁をもすがる思いで実際パソコンを利用して養殖している人の話を聞いた。私たちはこの研修で今ぶつかっている壁を超えられるかもしれないと感じ、さっそくパソコンを利用した養殖に取り組むことにした。

それまで、モイストペレットを主体に給餌していましたが、栄養価が高く、カロリー計算も行いやすいエクストルーデッドペレット、いわゆるEP餌料中心に餌を変えていった。

パソコンでは餌の種類にあわせた給餌量、給餌間隔を一瞬の内に計算してくれる。数字の打ち込みをいれても数分ですむ。これまで、海面作業が終わった後に、1時間も2時間も苦勞して計算していたことを思うと天国と地獄の差があった。(写真)

ただ、パソコンが示す給餌量および給餌間隔は、今までの給餌方法とまったく違っているので、ぐんぐん成長していく、食欲旺盛なハマチの若魚が、EP餌料だけで本当に育つのだろうかと内心不安になった。

しかし、この心配は無駄であったことがわかった。パソコンで計算した量のEP餌料を給餌して育てたハマチは、これまでの飼育方法で育てていたハマチより成長が良くなり、2年目の11月までかかって4キロにしていたハマチが、今では10月までに4キロになり、出荷調整を行える余裕が出てきた。今までより高い値段でハマチを販売することが可能となったのである。(図-5)

そのうえEP餌料は、モイストペレットのように餌を調合する手間がないので、給餌経費や時間が削減され、その分網の手入れや養殖管理に時間がかけられるようになり、雇用経費も軽減できた。

6. 波及効果

私たちは勘と経験による父親世代の経営方針から、生産コストや収益性を重視した自分たちの経営方針に転換することができた。

帳簿による記帳は、大変面倒で難しいものだと思う。しかし、パソコンが面倒で難しいところを楽にしてくれる。今はパソコンがとても楽しく使えるようになった。そしてより詳しい現状分析が素早く行えるようになり、モジャコから出荷までを通した生産計画を立てることが簡単にできるようになった。

さらに、ハマチの適正給餌量を与えることは、経営の面からだけではなく、漁場への有機物負荷を軽減できるという、漁場環境を守るうえからも有効だと思う。

最近では養殖部会でさらに経費を落とすことができないかを話し合えるようになり、部会員による共同作業化や筏の耐用年数、さらに漁場環境にまで話が及ぶようになった。現在は出荷や網替え、

計数などの作業実施日を部会で決め、部会員全員が出て作業を共同で行っている。これにより、人件費の削減が図られるようになった。また、養殖筏にプラスチックでコーティングを行い、耐用年数を延ばし経費削減に取り組んでいる地区に研修へ行き、現所在地元で実際実施して検討を行っている。漁場環境改善のための石灰散布も計画している。このように人件費の削減や経費削減だけに止まらず部会全体の活動自体も活発になっている。(写真)

7. 今後の課題

最近、私たちハマチ養殖業者に朗報があった。それは長崎県総合水産試験場が早期モジャコ種苗の大量生産に成功したとのニュースである。このことは、天然モジャコ漁の好、不漁によって、養殖尾数の計画が左右される心配がなくなっていく可能性がある。

今年、南串山町で実施している早期人工モジャコの養殖試験においても順調な成長を続けており、将来、ハマチ養殖の経営安定に大きな期待が持たれる。

今後は、これまで行ってきた日々の養殖管理を怠ることなく、また部員各自がパソコンを使った、きめ細かい養殖管理の手法を導入することにより経営の安定を図り、健康で安心、そして高品質な南串山のハマチブランド確立を目指してがんばって行きたいと思う。

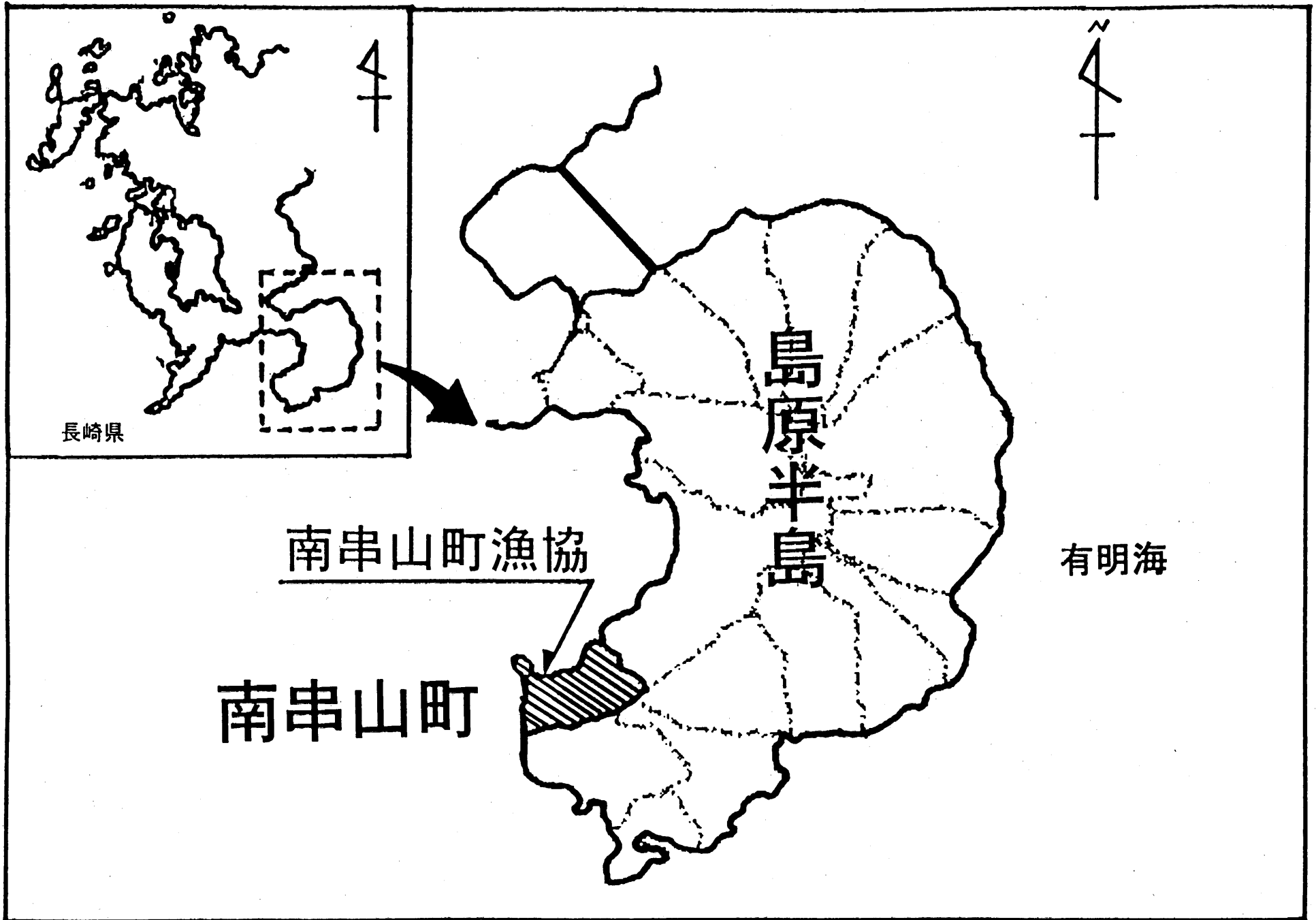
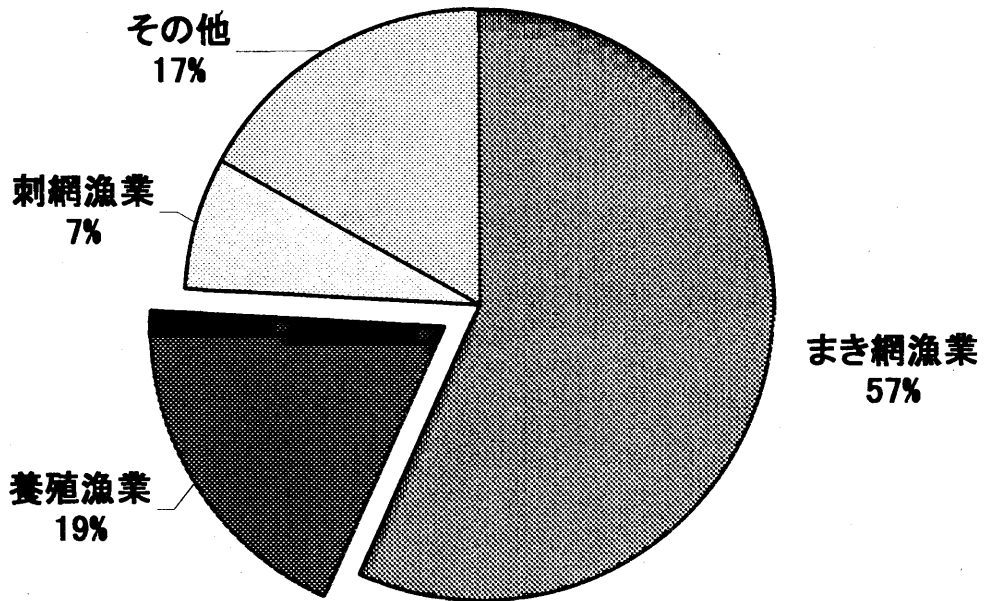


図1 南串山町及び南串山町漁協の位置

平成10年度漁協管内漁獲量



平成10年度漁協管内漁獲金額

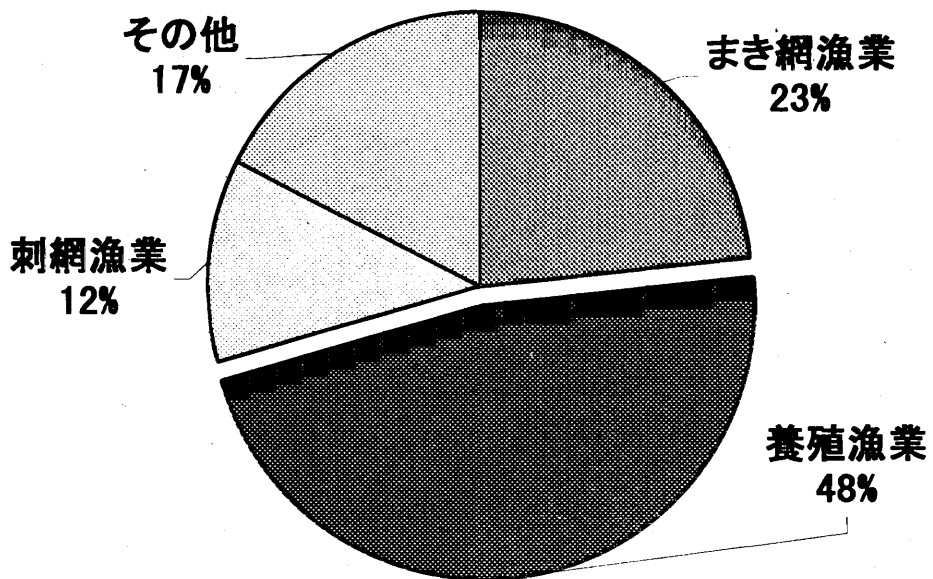


図2 平成10年度漁獲量および漁獲金額

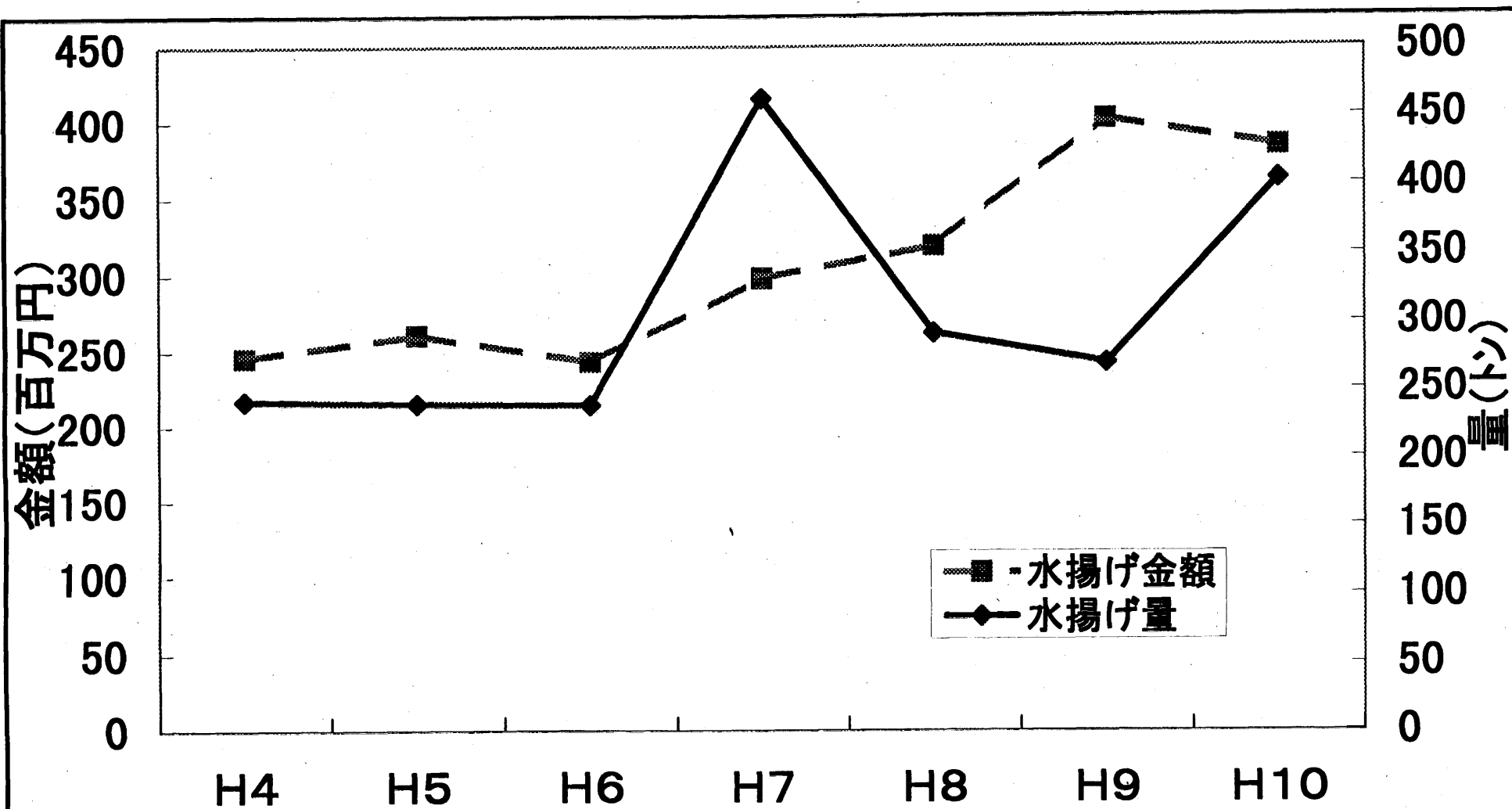


図3 水揚げ金額と量の推移

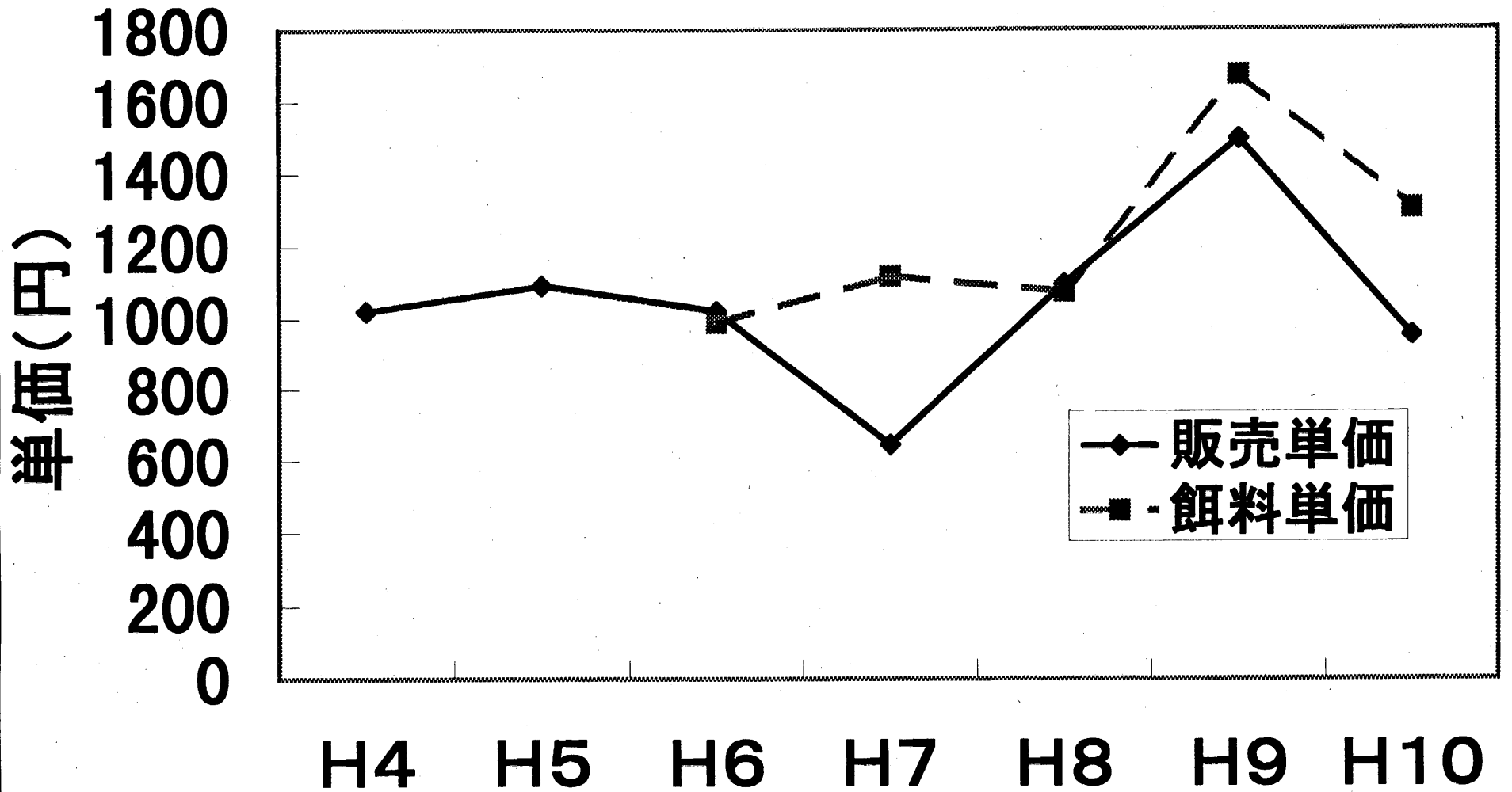


図4 販売・餌料単価の推移

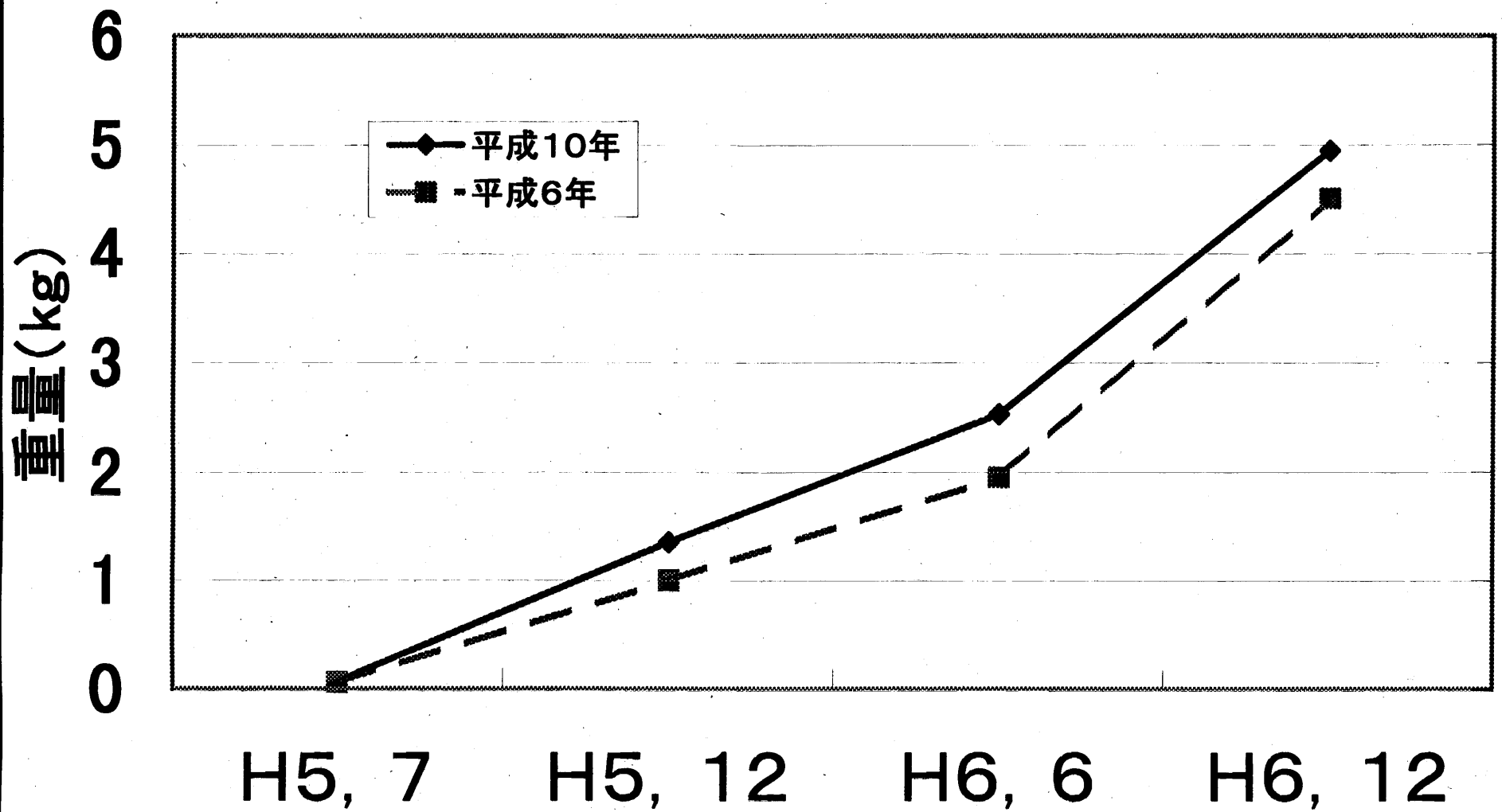
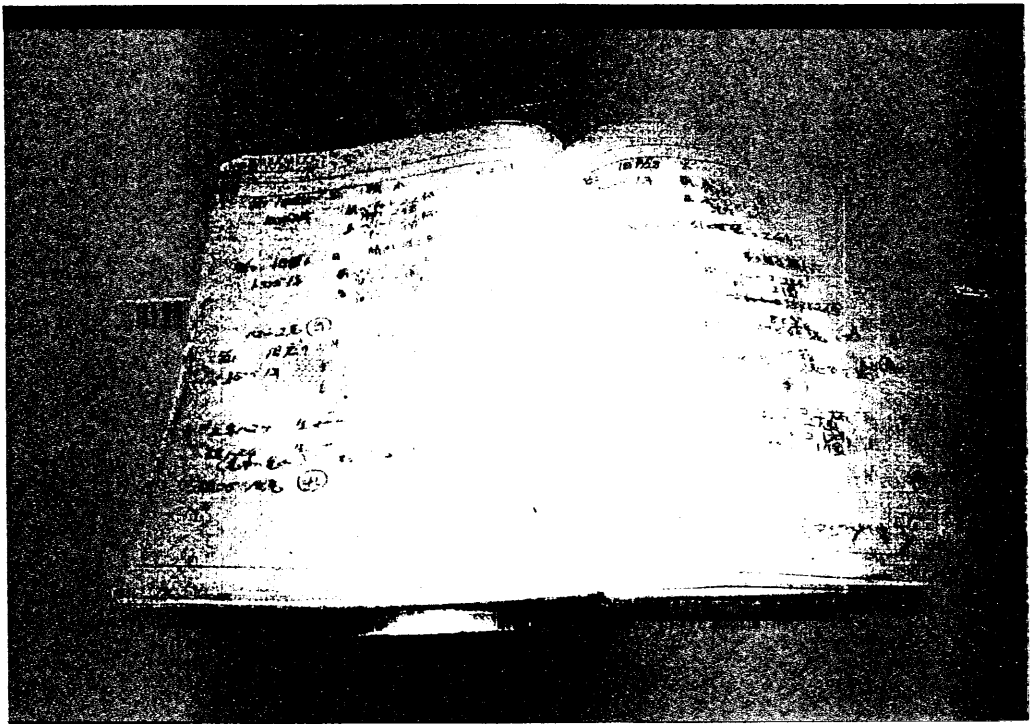
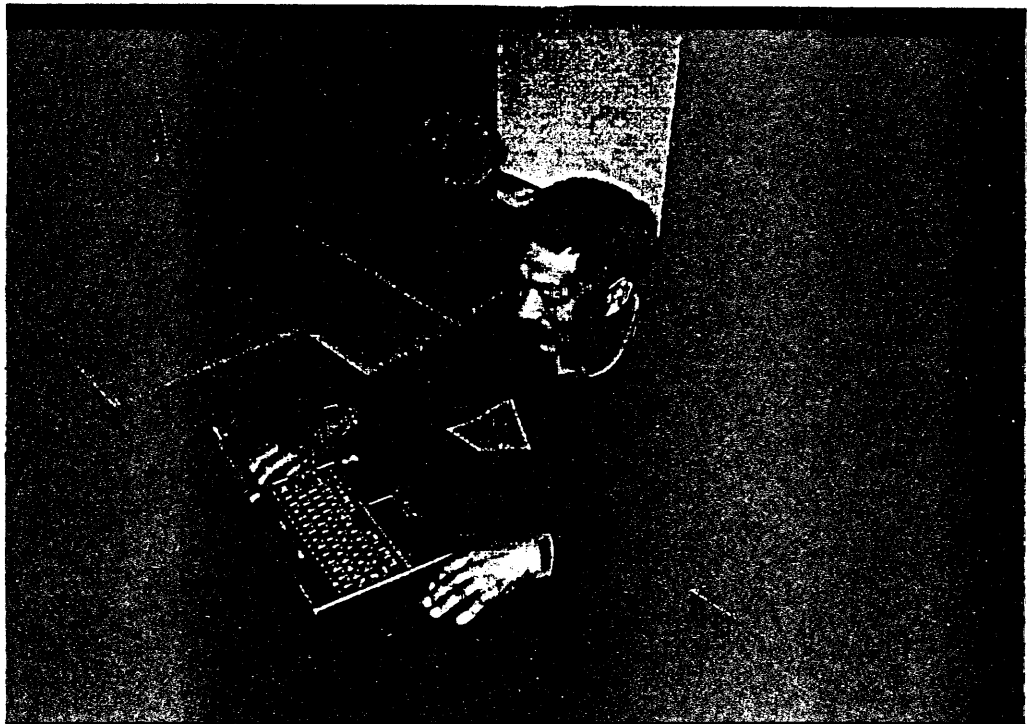


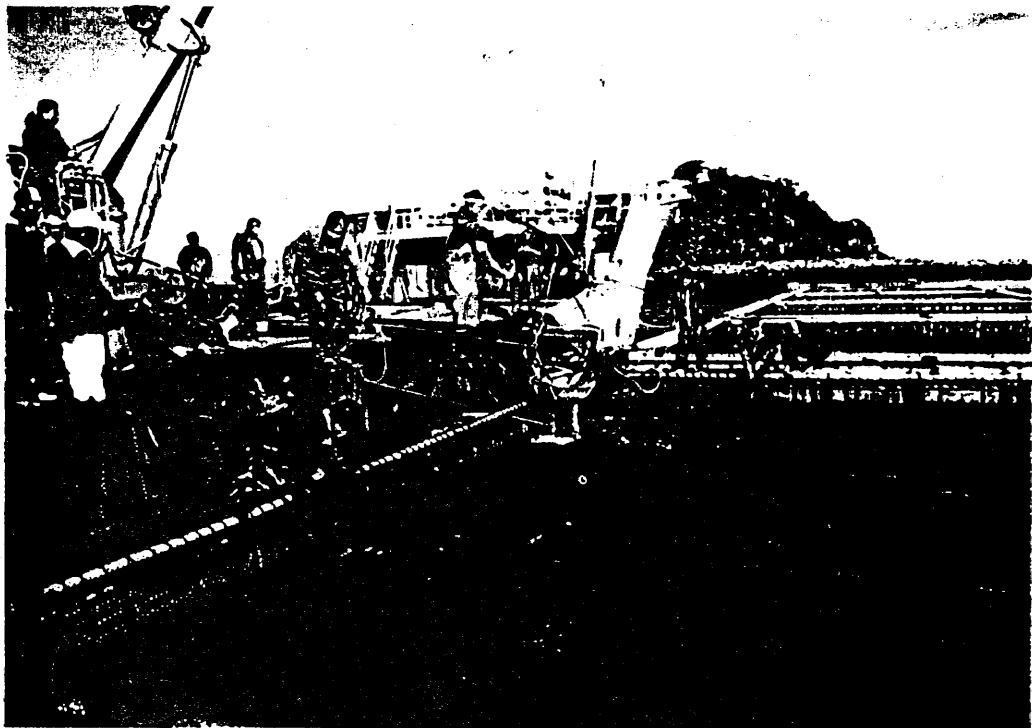
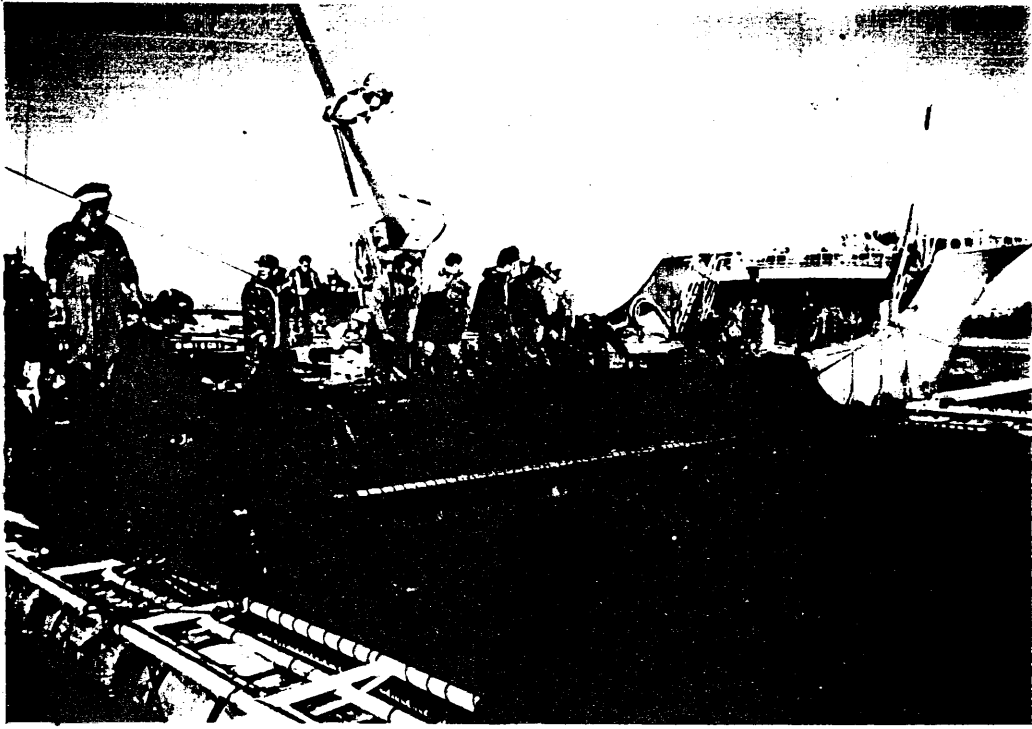
図5 ハマチ重量の推移



手計算による記帳状況



パソコンによるデータ入力状況



共同作業による出荷状況